

令和3年度 富山中部高等学校アクションプラン				－ 1 －
重点項目	学力の向上			
重 点 課 題	①授業の水準を高める。 ②生徒がテスト等によって学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導する。			
現 状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。			
達 成 目 標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数		②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し、実践できた生徒の割合（学習アンケート）	
方 策	各教科 年間 2回以上		80%以上	
	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善をはかる。		○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施し、テストを見直す意識を高めるとともに、その後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるPDCAサイクルの徹底を図る。 ○教師が常に自己研修に励み、担任や教科担当者による個別指導の充実を図る。 ○個々の学力に応じた教材について、研究開発をさらに進める。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかりと身につけさせる。	
達成度	○各教科年間2回以上実施した。		○テストを見直す意識が「強くなった」または「強くなった教科もある」と答えた生徒81% ○「テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れ実践しようとしている」と答えた生徒68%（学習アンケートは1月のもの）	
具体的な取組状況	《互見授業・教科別授業研究会》 1学期・2学期を通じて17人の教員が「授業研究のための互見授業」を行った。授業実施後には、教科別の協議会や授業研究会を持ち、生徒の学力、学習実態について分析するとともに授業力向上に向けた指導法の検討を行った。なお、2学期の分散登校期間に行われた1・2学年のオンライン授業において、オンライン授業の互見授業を行い、ICTを活用した遠隔授業についての問題点や利点などを相互に検証した。			
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・定期考査、実力テストの後は、解き直しノートの提出させるほか、教科通信を発行することで、自主学習の具体的な実践例を示している。（数学） ・定期考査、実力テストのたびに、テストの見直しシートを提出させている。日頃の小テストを徹底し、直しを提出させるなど、復習の徹底を図っている。（英語） ・定期考査、実力テストだけではなく、日頃の小テストにおいても、課題への有効な取り組み方を示している。（国語） ・長期休業中の課題に効率的・計画的に取り組めるように、計画表の提出を休み前後で徹底し、担任面接で学習方法についてアドバイスをを行っている。			
	2年 ・考査、模試の終了後に、振り返りシートや解き直しプリントを配布し、取り組ませている。 ・第4回、第5回実力テスト終了後に解説授業を2時間行い、テストの見直しを促している。 ・行事予定やカレンダーを配布し、先々の見通しをもって学習計画を立てるよう指導している。 ・2学期以降、国語で添削指導（希望者）を行い、自主的な学習を促している。3学期からは英語も行っている。 ・長期休業前と終了後の面接を通して、学習計画とその取り組み状況を自己評価させている。			
	3年 ・各進学模試終了後、『模試解説授業』を行い、問題設定の狙いや解法の解説を行い、テストの見直しを意識づけた。（第4回は分散登校時の授業補填をこの時間に行った。） ・6月に難関大学の過去問配布や、昼休みのリスニング企画を行い、自学自習の方向付けや意識付けを行った。また、長期休業前には学年集会や休業中のしおりを通して、効果的な学習ができるように指導をした。 ・7、9月～11月に難関大講座等の特別講座を設け、自主学習支援を行った。 ・生徒の学力を学年会議において定期的に分析し、強化・補強を図った。担任による個人面接、教科担当による教科面接を行い、個々の現状に応じた助言をした。			
評 価	A	《互見授業・教科別授業研究会》 各教科において2回以上の教科別授業研究会が実施され、その概要が報告されており、生徒の主体的、対話的な深い学びを意識した授業方法の改善が検討されている。互見授業においては、できる範囲で行われており、授業改善につながっている。		
	B	《テストの見直し、自主的な学習計画》 1年 ・テスト後の見直しをしている教科は、数学(約70%)が3教科中、最も高かった。できなかった分野を、その後の学習計画に取り入れている割合は、数学が最も高かった。テストの見直しがとれない理由としては、次の課題や予習に時間をとられ十分に時間がとれないと感じている生徒の割合が最も高い。		
		2年 ・国数英について、「定期考査や実力テスト終了後、できなかった問題をどうしていますか」という設問に対して、「一通り見直したり、解き直したりしている」割合は高いのだが、丁寧な復習まで行っている生徒はあまり多くはない。 ・地歴、理科への見直しの意識が高く、その後の学習計画に取り入れている生徒の割合も高い。		
		3年 ・「テストを見直す意識が強くなった」または「強くなった教科もある」生徒の割合は90%（昨年度94%）、「進学模試後の解説授業がためになっている」または「少しためになっている」生徒の割合は92%（同88%）と高い水準を維持している。見直しをしたり、その後の学習に取り入れている教科は数学、理科、英語が多い。テストの見直しによって学習活動におけるPDCAサイクルを確立している生徒が増えた。		
学校評議員の意見	《互見授業・教科別授業研究会》 オンライン授業の現状に興味がある。互見授業と教科別の研究会は重要と思われる。具体的にどのような意見交換がなされたのか。切磋琢磨されることは非常に良いと思う。互見授業はもっと多くてもよいのではないかと。			
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 学力格差の現状とその対応が気になる。学年会議の分析や担任の面接指導の課題は何か。 新教育課程の実施において従来との変更点は何かあるか。 PDCAサイクルは重要。民間企業ではPDを重視しがちだが、本校ではCとAをきちんとフォローしている点が評価できる。			
次年度へ向けての課題	《互見授業・教科別授業研究会》 ・新学習指導要領に基づき、新教育課程が来年度1年生から実施される。新教育課程においては科目数の増加がある中で、現状通り32単位で授業を編成しており、各教科概ね3年間での単位数が現行カリキュラムより減少している。この減少したカリキュラムの中でアクティブラーニングやICTを最大限に活用して、授業での指導内容の精査および生徒の主体的な学びの一層の促進を互見授業、教科別授業研究会で行っていく必要がある。			
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 ・生徒にテストの見直しを行なわせるためには「週末課題として課す」、「解説授業を行う」などの外発的な動機づけも必要である。生徒自ら課題を見つけ、自主的に学習計画を立てさせるために、担任や教科担当が、長期的な見通しを持って、段階毎に具体的なアドバイスを絶えず与えていく必要がある。また来年度より導入される観点別評価とも合わせて、生徒が立案した学習計画を、教科面接や担任面接で学習実態を把握し、学習内容の評価および指導を行う必要性が高くなっている。			

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

令和3年度 富山中部高等学校アクションプラン		ー 2 ー
重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重 点 課 題	①自己の将来像に連なる進路意識を醸成し、進路希望の実現をはかる。 ②第一志望をあきらめず、難関大学への進学をめざす意識を育成する。	
現 状	①全員が大学への進学を希望している。大学などと連携した探究的な学習活動・体験の機会を活用する工夫が必要である。 ②自分の夢や希望を具現化するために、意欲的に情報を収集し活用する姿勢に欠け、進路選択が遅れる生徒が増加傾向にある。	
達 成 目 標	① 大学探訪・進路講演会に満足した生徒の割合	②難関10大学+国公立医学部出願した生徒の割合
	大学探訪 … 90%以上 進路講演会 … 90%以上	50%以上
方 策	○大学生活を具体的にイメージさせるために、コロナ感染拡大状況に留意しつつ、2学年の10月に「大学探訪」を行い、卒業生を招いて座談会を開く。3月には大学受験を終えた直後の卒業生、既卒生を招き、「先輩に学ぶ会」を行う。 ○将来の社会的・職業的自立に向けた一人一人のキャリア発達を促すために1学年の生徒に対し進路講演会を行う。事前に希望を集約して要望の多い分野から講師を招き、15分野以上の分科会を設置し実施する。また生徒が具体的に進路を考えられるように、講師は生徒にとって身近な存在として、本校卒業生を主に依頼する。	
達成度	・オンライン語る会 88.1% ・進路講演会 83.7%	・53.4%（出願149人／卒業予定279人） （参考R2年51.3%、R1年42.5% H31年47.8%）
具体的な取組状況	1 学年 ・単年度企画として「富山の企業魅力体験バスツアー」を7月28日（水）に普通科5クラスで実施、富山県庁をはじめとする公的機関や北陸電力など企業で見学・体験を行い、職業観を育て、就業を見据えた文理選択や学部学科・大学選定に役立てた。 ・社会の様々な分野で活躍されている方々を招いて、進路講演会を実施した。事前アンケートを参考に法律、行政、経営、心理学、報道、教育、理工、医学、薬学、マスコミ等の分野から15分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。 ・探究科学科で行う予定であった能登臨海実習、「とやま賞」受賞講演への出席などは中止となったが、県内企業・施設研修を行い進路意識を高めることができた。 ・国際人材育成と科学力養成を目的とするオーストラリア研修は、オンラインによる交流会が計画されている。	
	2 学年 ・学年保護者懇談会（5月）を開催し大学入試の概要などを伝えた。 ・10月に予定していた大学探訪並びに企業訪問は、新型コロナウィルス感染症防止のため中止となった。代替事業として、東京大学在学中のOB・OGらによる「東大生とオンラインで語る会」を8月と12月に開催し、70名が参加した。 ・夏期休業期間を利用して富山大学で薬学実習を行い、14名が参加した。 ・3月に卒業生を招いて「先輩に学ぶ会」、駿台予備学校から講師を招く「進学探究講座」を予定している。	
	3 学年 ・「鍛錬・自治・信愛」の伝統的精神を継承し、21世紀の日本を担う優れた知性、豊かな人間性を備えた生徒の育成を計るため、授業を大切に、粘り強い学習を日々繰り返していくことを呼びかけた。 ・7月には学年集会やしおりを通し、志望大学合格のため、夏季休業中に取り組んでほしい課題やそれぞれの大学合格までの学習プランを紹介し、個人面接を通じてどのように学習するか担任と計画を立てた。 ・進学模試や定期考査を通じて、PDCAサイクルでの学習を指導している。 ・7月と9月～11月の3か月に、各学習段階に応じた特別講座を開講し、学力の伸長を図るとともに、問題を通して各大学が求める学力水準を示した。 ・全教科にわたって、受験まで大学別添削指導を行っている。	
評価	B	《東大生とオンラインで語る会》 ・生徒10名程度に東大生が2～3名つくという、大学探訪の際の「語る会」と同様の人数で行うことができ、双方向のやりとりもスムーズに行えた。 ・高校時代の学習法や大学での生活について、体験談を直接聴けたことに対する生徒の満足度は高かった。 ・情報教育部との連携で、必要な機器の購入や設置などが迅速に行えた。 《進路講演会》 ・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野（15分野）の講師を招き、10月上旬に開催した。 ・将来を見据えた適切な文理選択につながるとともに、目標・進路が明確になり、学習意欲が向上した。
	A	《進路の実現》 ・共通テスト難化という逆風がありながら、過半数の生徒が難関10大学および国公立大学医学部医学科に出願した。 ・例年のように1月末からはほぼ全教員による添削が行われ、生徒は熱心に食らいつき、個別学力を伸長させた。 ・推薦入試と国公立大学前期試験の結果において、難関国立10大学に63名（うち東大9名、京大8名）国公立大医学部医学科に18名が合格を果たした。国公立大学前期試験全体でも148名の合格と、昨年の142名を上回った。※いずれも現役生のみ
学校評議の意見	《大学探訪・進路講演会》 「富山の企業魅力体験バスツアー」は面白い企画だが、どのような経緯で行われたのか。 本校卒業生の豊富な人材の活用およびデータベース化が重要であろう。 多様性を尊重する時代となっている。難関大・医学部とは別の物差しを取り入れることも必要なのではないか。 日々の学習をなぜやるのか目的を持つという意味で大変有効であると思う。	
	《進路の実現》 医学科志望の偏りが気になる。理工系人材の育成も大切である。 誰のため、何のための進路指導なのかを今一度確認し、大学合格がゴールではなくスタートだと思えるような進路指導をお願いしたい。 高大連携の一環として大学に積極的に働きかけてもよいのではないだろうか。 偏差値にとらわれず、目的を持った大学選びを指導していただきたい。 生徒に応じて適切な面接指導に感謝している。	
次年度へ向けての課題	《大学探訪》 ・進路意識の向上のためにはたいへん重要な行事である。新型コロナウィルス感染症の状況をふまえ、感染対策に配慮すれば実施が可能と判断されたら、行事を復活させたい。これまでの実施方法や内容は非常に充実したものであった。大学事務局や教授、OB・OGとの連携、模擬授業や座談会の設定など、これまでのノウハウをしっかりと引き継ぎたい。	
	《進路の実現》 ・多くの生徒が多様な進路と高い目標を両立させた結果を残した今年度入試をできるだけ早い時期に分析し、職員間で共有して次年度に活かしたい。 また今年涙をのんだ能力の高い過年度生に手厚いフォローが必要である。	
評価基準	A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった	

令和３年度 富山中部高等学校アクションプラン				－ ３ －	
重点項目	読書指導・体力の向上				
重 点 課 題	①読書指導を充実させ、図書館利用の広報周知を行う。				
現 状	②体力の向上に努めさせる。				
	①生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。				
	②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。				
達 成 目 標	①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書の時間の数		②２年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合		
	広報活動１２回以上、 読書の時間年間１２時間以上（１・２年）		７０％以上		
方 策	○図書の広報刊行物を月一回以上発行する。 ○読書の時間を計画的に確保し、探究型読書を実施する。また、年２回「読書会」を行う。 ○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行を通して図書委員による主体的な活動を行い、図書館への理解を深めさせる。		○全学年、体育の授業時に、毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。		
達成度	・広報活動２０回以上 ・読書の時間 １学年 普通科・探究科学科１５時間 ２学年 普通科・探究科学科１５時間		・２年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合 ８６．５％		
具体的な取組状況	《読書・広報活動》 ・新入生に対して、図書館オリエンテーションおよび読書オリエンテーションを実施した。 ・図書委員作成の「図書案内」を年11回発行し教室に掲示した。司書作成の「新着図書案内」を月２～３回、教室・職員室前・図書館前に掲示した。 ・図書委員による「本の福袋」を７月に作成した。 ・図書アンケート結果と書籍を紹介する特集冊子「本の虫」を１月に全生徒に配付した。 ・図書委員会の活動や感想文・感想画の優秀作品を紹介する図書館誌「富山中部図書館」を２月に発行し、全生徒に配付する予定である。				
	《読書・読書運動》 ・ＬＨの中に読書の時間を設定し、担任と生徒が同じ本と一緒に読む活動を行っている。 ・８月と12月に、１学年は読書会、２学年はビブリオバトルと意見文作成を行った。そのまともを図書館誌で紹介する予定である。 ・６月に読書・教養講座を実施した。講師は本校ＡＬＴのハナ・ナナバディ先生で、モンスターの歴史から東洋と西洋のモンスターの違いなど、幅広い視点でモンスターに関する講演をして頂き、多くの生徒・教員が熱心に聴き入っていた。 ・文化祭で、読書会の記録の掲示（１学年）やビブリオバトルの決勝戦（２学年）、図書委員による企画展示（図書クロスワード）などを行い、図書活動の活性化を図った。				
	《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるように実施した				
評価	B	《読書指導》 ・全教職員の共通理解および図書委員の主体的な活動で、充実した図書活動を実施することができた。図書館利用者・本の貸し出し数は例年並みである。 ・今年度の必読図書は概ね好評である。			
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。			
学校評議員の意見	《読書・広報活動》 高志の国文学館訪問だけでなく、県内の文化施設をもっと活用してほしい。 良い取り組みだと思うので継続してもらいたい。 どのような書籍を選定しているのか興味がある。 大変忙しい生徒たちに読書習慣を根付かせている活動に感謝している。				
	《体力の向上》 サーキットトレーニングは本校の伝統として効果を上げているが、生徒の現状を踏まえて今後、改善を加える必要性もあるのではないかと。 クラス対抗の駅伝大会を企画してはどうか。 文武両道は本校の伝統の精神だと思います。今後も鍛錬を期待しています。				
次年度に向けての課題	《広報活動・読書運動》 ・図書館棟と教室棟が離れているため、生徒が図書館棟に足を運び、手軽に本を手にとってくれるような工夫を続けていく必要がある。 ・読書の時間の目的を再度確認し、本の選定を慎重に行う。				
	《体力の向上》 ・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。				

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

令和３年度 富山中部高等学校アクションプラン			－ ４ －
重点項目	学校行事・部活動の充実		
重点課題	①体育大会をより充実させる。 ②部活動を充実させる。		
現状	①体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また、体育大会を通じて、生徒たちは人間的にも大きく成長している。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は、学習と部活動を両立させるために、懸命に取り組んでいる。		
達成目標	①体育大会に充実感を持つ生徒の割合 ＊大会終了後に実施する、生徒会によるアンケート	②部活動に充実感を得た生徒の割合 ＊３年生全員を対象にした、８月下旬のアンケート	
	８０％以上	７０％以上	
方 策	○体育大会の競技や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常にはかる。 ○競技の練習や準備活動が行き過ぎないよう、適切な指導を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。	
達成度	新型コロナウイルスの影響で中止	９６．２％	
具体的な取組状況	《体育大会》 ・生徒会執行部員、各団の団役員生徒、教員との間で意見交換を積極的に行い、生徒主体の大会運営に努めていたが、残念ながら中止となった。		
	《部活動》 ・文化部、運動部とも感染症予防対策行い、活動場所を工夫して行った。 ・例年の年間計画を変更し、感染症の広がりを見ながら活動を行った。		
評価	なし	《体育大会》	
	A	《部活動》 ・各部の活動内容に合わせて感染症対策を工夫し、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。全国大会・北信越大会で、好成績を収めた生徒が多かった。	
学校評議員の意見	《体育大会》 中止したことによる生徒への影響はどうか。状況が許せば、次年度は是非開催していただきたい。 同じ目標に向かって力を合わせる貴重な体験である。さらに伝統の継承も大切。 中止は未曾有のことだったと思います。しかし、この事態を経験した生徒は体育大会では得られなかったことを手にしたと思います。その生徒たちの今後の成長を期待しています。 統一ホームルームの「格差・差別」は良いテーマだと思う。討論の中身に興味がある。		
	《部活動》 コロナ禍での96.2%の達成はすごいことだ。さらなる成果をあげてほしい。 運動部、学芸部とも活発に活動し、成果をあげていることを嬉しく思います。		
次年度へ向けての課題	《体育大会》 ・唯一体育大会を経験した現２年生を主体として、伝統をいかに繋げることができるか。 ・生徒の安全面および感染症や熱中症などの健康面に配慮し、競技種目内容の変更や全体練習の活動時間、活動場所などを検討する。		
	《部活動》 ・部活を通して動を生徒が人間的に成長することを期待するとともに、活動時間の徹底、活動場所および部室等で、清掃や感染症予防対策をより徹底して行う。		

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

令和3年度 富山中部高等学校アクションプラン ― 5 ―		
重点項目	「科学的思考力」と「自己発信力」の育成による「探究力」の伸長	
重 点 課 題	①探究活動を計画的に実施して、「科学的思考力」を高める。 ②様々な研修や学術交流を通して、「自己発信力」を高める。	
現 状	①これまで、探究科学科を中心に、野外実習や課題研究などのさまざまな探究活動を通して、「科学的思考力」の向上をはかってきたが、SSH指定校としてより計画的に「科学的思考力」を育成する必要がある。 ②海外研修などの研修・実習や学術交流に参加する生徒が増えている。	
達 成 目 標	①－1 野外実習、大学実習に対するそれぞれの目標達成度 ＊各実習の事後に実施するアンケート	②研修参加生徒に対する研修前後のアンケート結果の分析
	①－2 探究活動のルーブリックによる評価 ①－1 各90%以上 ①－2 レベル3に到達した生徒の割合 80%以上	①研修に参加した生徒の事後の自己評価アンケートで、「自己発信力」が向上した割合 70%以上
方 策	○野外実習や大学実習では、実習の内容や方法について十分に打合せを行ない、生徒が興味関心を抱き、積極的に参加できる工夫をする。 ○課題研究をルーブリックを用いて評価し、「探究力」の伸長をはかる。大学等と連携して、探究活動を充実させる。	○研修や学術交流に向けて積極的に自分の意見や考えを発信できる力を育てる工夫をする。 ○事後研修により、研修や学術交流を通して身につけた「自己発信力」の維持向上を図る。
達成度	①－1 野外実習…観察力が向上96% 大学実習…「科学的思考力」がかなり向上36%、向上57% ①－2 2月の最終評価でルーブリックによる評価レベルが3に到達した生徒の割合…94% (2月7日集計)	②海外研修はすべて実施できなかった。
具体的な取組状況	《SSH事業》 ・野外実習は、立山自然観察実習をホーム毎に日帰りで実施した。 ・大学実習では、富山大学において2年普通科の希望者も含めて14名が2講座に分かれて3日間の薬学実習を行った。その成果を文化祭でポスター発表した。 ・2年探究科学科の課題研究では、富山大学の教官13名に指導を受けた。6月と11月にゼミ毎に研究内容についての指導、1月の発表会では研究についての評価をしてもらった。 ・探究活動の評価に当たっては、生徒によるセルフ・アセスメント、複数の教員教員によるルーブリックを用いた評価、さらに生徒との面接の実施や「探究ノート」の評価を取り入れ、適正かつ客観的な評価を心がけた。探究活動・発表の2種類のルーブリックを用いて評価を行い、評価の結果を面接などで生徒に還元し、生徒自身が次の目標を持てるようにしている。 《海外研修》 ・アメリカ研修は、今年度実施せず。 ・東北育才学校との交流は、今年度実施せず。 ・オーストラリア研修は、今年度実施せず。	
評価	B	《SSH事業》 ・改善を図って立山自然観察実習を実施できたため。 ・ルーブリックによる教員評価と同時に実施しているセルフ・アセスメントでは、生徒は高い自己評価をしており、「探究力」の伸長を実感していることがわかる。
	C	《海外研修》 ・すべての海外研修を実施できなかったため。 ・代替研修を検討しているが、未だ実施できていないため。
学校評議員の意見	《SSH事業》 SSH2期目の課題、目的は素晴らしいと思う。卒業生のその後の活躍について知りたい。 物事の本質を深く考察できる生徒を育成してほしい。 意識が高く、優秀な生徒が多いので、今後も充実した内容で進めていただきたいです。 《海外研修》 コロナ禍では海外研修はまだまだ厳しいだろう。その状況下でもできることを模索してほしい。	
次年度へ向けての課題	《SSH事業》 ・1年次のSSH基幹探究では「探究モジュール」を取り入れ、しっかりとした基礎作りに取り組んでいる。2年次には大学教官の指導も受けて本格的な探究活動を行い、3年次の発展探究での英語での発信につなげている。3年間を見通し、一貫性ある効果的な指導体制や評価法について、さらに検討していく。 ・能登臨海実習に代わる野外実習を検討する必要がある。 ・的確に生徒の活動を評価し、評価の還元により生徒の「探究力」の伸長をはかる。 《海外研修》 ・実施にむけて準備を進めるが、代替措置の検討を早急に進める必要がある。 ・海外研修中の実践的なコミュニケーションが円滑に進むように、事前研修の充実が必要である。 ・オーストラリア研修では「自己発信力」を高めるとともに、「科学的思考力」の向上のために研修内容を改善しており、その成果が期待できる。 ・参加者が研修で得た能力や体験を進んで今後の学校生活や将来に生かすことや、研修の成果を広く校内に伝えることが必要である。	
評価基準	A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった	